

山本悌二郎のコレクションとその交友

——内藤文庫所蔵の未刊書簡を手掛かりに

邱 吉

Yamamoto Teijirō's Collections and His Friendships:
Focusing on “the Unpublished Letters” in the Naito Collection

QIU Ji

Yamamoto Teijirō (1870-1937) was well known as an entrepreneurs, politician, and collector. In his whole life, he was eager to collect the Meiji and Taishō periods' Chinese paintings and calligraphy. Those collections were later preserved at Chokaidō Museum in Mie Prefecture, called “Yamamoto collections”. As a key person of Chinese paintings and calligraphy's collector in Modern Japan, Teijirō was significant and influential towards the Chinese arts, which introduced to Japan after the 1911 Revolution. However, there is still insufficiency on the study of Teijirō. This paper focus on the relevant preface and “Yamamoto Teijirō's letters to Naitō Konan”, for the purpose of analyzing Teijirō's life, his collections, and his friendships.

Keywords: Yamamoto Teijirō, Naitō Konan, Naitō Collection, Unpublished Letter

キーワード：山本悌二郎、内藤湖南、内藤文庫、未刊書簡

はじめに

二十世紀初めの中国では、1900年の義和団事件を経て1911年の辛亥革命で清朝が倒壊して未曾有の大混乱に陥り、中国書画が大量に海外へ流出し、その多くが日本に流入した。また、大正時代（1912-1925）、第一次世界大戦によって商品輸出が急増した好景気により、日本の経済発展は頂点に達し、大量に中国書画などの美術品を購入する余裕ができた。山本悌二郎（1870-1937）は、財界・政界・文芸界の要人として活躍するかたわら、中国金石書画の蒐集につとめ、日本に冠絶する山本コレクションを作りあげた。

これまで、山本悌二郎の研究については、澄懷堂収蔵の中国書画をめぐる内藤湖南と悌二郎との交流

に関する杉村邦彦氏の考察¹⁾と、井後尚久氏による「昭和三年の御大典と山本悌二郎」(『書法漢学研究』第19・20号、2017)および「山本悌二郎コレクションと澄懷堂美術館」(『中国21』第47号、2018)がある程度で、きわめて少ない。本稿では、これらに示唆を受けつつ、悌二郎の生い立ち、中国書画コレクション及び内藤湖南との交友を、関連序跋とこれまで公開されていない内藤文庫所蔵の「内藤湖南宛 山本悌二郎書簡」を手掛かりに考察したい。

一 山本悌二郎の生い立ち

山本悌二郎(1870~1937)、号は二峯、香雪書屋、悌二郎はその名である。山本悌二郎の伝記については、佐渡の郷土史家・俳人の山本修之助の著書『近代佐渡の人物』(佐渡郷土文化の会、1977)に収録されている。それによれば、悌二郎は明治3年(1870)新潟県佐渡郡(佐渡市)に、漢方医・山本桂の二男として生まれた。明治15年(1882)上京し、二松学舎に入学した後、獨逸学協会学校(獨協中学・高等学校)に転校しドイツ語を学んだ。明治19年(1886)同校を卒業後、駐独公使品川弥二郎に随行し、宮内省給費生としてドイツに留学した。経済学・農政学を学び、1893年4月ライプチヒ大学(Universität Leipzig)で農学の博士号を取得した。明治33年(1900)台湾製糖株式会社の設立に参画し、その常務取締役、専務取締役、社長を歴任した。昭和2年(1927)田中義一内閣(1927~1929)において、また昭和6年(1931)に犬養毅内閣(1931~1932)において、二度農林大臣を務めた。晩年には大東文化協会副会頭となり、国体明徴運動を熱心に推進していた。

一方、悌二郎は少年時代に儒者の円山溟北(1818~1892)の感化を受けたため、同時代の多くの知識人と同じように、漢学の訓練を十分に受け、漢詩と書を善くした。詩集に『遊燕詩草』、『昼錦集』、『梅花集』、『蕉雪吟館詩草』がある。また、実業家、政治家として名を馳せる一方、中国金石書画の収蔵家として国内外の識者の間にも広く知られている。

さて、悌二郎の金石書画蒐集の趣味については、彼は『澄懷堂書画目録』の自序で次のように回顧している。

先考納斎、書画の鑑賞に精しく、尤も儒林の墨蹟を喜び、収蔵の富、一時山を成せり。余少時傍に侍坐して、目之を視、耳之を聴き、感孚浸濡、年久うして竟に自から亦趣味の一斑を解するに至れり。先考歿後、家蔵の名品散逸して多くを存せず、余亦風塵に奔走して賞玩の暇なかりき。二十餘年前居を東京にトしてより、好古の意又動き、先づ先考の志を紹き本邦儒宗の遺墨を蒐集し、更に進んで支那の書画金石に及び旁求搜羅一日も解らず。其の間一たび福建に到り、二たび杭蘇上海に遊び、三たび広東を過ぎり、近くは北平山東に遊び、到る所収蔵の名家を問ひ、精鑑の士夫を尋ね、攷確商量して獲る所の書画二千餘件に及べり。²⁾

1) 杉村邦彦「内藤湖南と山本二峯：澄懷堂収蔵の中国書画をめぐる」(『書学書道史研究』1996巻第6号)、17-36頁。

2) 山本悌二郎『澄懷堂書画目録』(文求堂、1932年)、1-2頁。

ここにいう「納斎」は悌二郎の父山本桂の号である。桂は漢方、経史を学び、漢方医として名をなした。序文によると、悌二郎の少年時代に培われた書画蒐集の趣味は家学の薫陶の賜物であったと思われる。それは日本の儒者の遺墨のみならず、中国の書画金石にも及んだ。中国南方の広東、福建、杭州、蘇州、上海、さらに中国北方の北平、山東にも足を運び、当地の収蔵名家を尋ね、書画2000余件を蒐集した。ここで特筆に値するのは悌二郎が明治から大正・昭和初期にかけて蒐集した2000余件の中国書画である。これら蒐集品より1176件を精選し、『澄懷堂書画目録』（全12巻、1932）として出版した。この目録は広く宋・元・明・清の中国の名家を網羅しており、現在李成「喬松平遠図」、仇英「四時宮落図」、謝時臣「黄鶴煙波図」、惲寿平「菊花図」などの名品は澄懷堂美術館に所蔵されている。

また、悌二郎の果たしたもう一つの文化事業は『宋元明清書画名賢詳伝』（全16巻、1927）の大著であろう。悌二郎の書画蒐集の功績について、紀成虎一は『宋元明清書画名賢詳伝』の序文において、次のように記している。

現代政海の名宿山本二峯先生は、平素風流儒雅、好むで畫を読み詩を談じ、その図書巻軸の収蔵に富めること、真に南面百城を擁するの概あり。玩賞の除、手づから漢土名賢の手蹟を編次し、名づけて澄懷堂書画目録と曰ひ、同好の士に頒たんと欲し、別に予に囑して之が傳記を艸せしむ。（中略）この一部十六巻の書、即ち是れなり。巻中傳を立つること、都べて五百五十有八家。³⁾

これによると、悌二郎は詩畫を善くし、金石書画の大収蔵家であるという。この伝記は『澄懷堂書画目録』の姉妹編として先に出版され、宋20、元26、明189、清323、計558名の書画家の小伝と図版150点を収録し、書画の研究鑑賞にはなくてはならない貴重な文献となった。

二 山本悌二郎のコレクション

山本悌二郎の中国書画蒐集について、内藤湖南は『澄懷堂書画目録』の序文で次のように評価した。

海内收儲之家、以赤縣法書寶繪之富鳴者、近日滋多。其在日下羣推前司農山本君澄懷堂爲第一。司農少游德國、（中略）平生於書無所不窺、善七言古今體詩、尤精鑒識、所藏卷軸冊頁以千數。試舉予所目睹法書、則敦煌出土六朝唐代寫内外典。宋蔡米以下至於明清名人手筆寶繪、則道玄圖卷、鳴沙佛象。董巨范許以下、東京南渡君臣之迹、以及近代鉅匠丹青、充棟溢架璀璨奪目。（中略）予既稔知司農蒐羅之力、又懿其措心之曠達、執翰而書之。昭和六年十二月九日、内藤虎。⁴⁾

この序文によれば、悌二郎の収蔵は「澄懷堂爲第一」という高い評価が与えられている。また、内藤は「善七言古今體詩、尤精鑒識」という学識を備えた悌二郎の鑑賞と収蔵に共感し、深い賛意を表して

3) 山本悌二郎、紀成虎一『宋元明清書画名賢詳伝』（復刻）巻一（思文閣、1973年）、1-2頁。

4) 神田喜一郎、内藤乾吉編「澄懷堂書画目録序」、『内藤湖南全集』第14巻（筑摩書房、1976年）、98頁。

いる。悌二郎は「澄懷堂」を堂号とし、東京目黒の自邸の玄関に翁同龢（1830-1904）の書「澄懷堂」を掲げ、ここで『澄懷堂書画目録』を編纂した。「澄懷」とは、中国六朝山水画の始祖とされる宗炳が晩年江陵（湖北省）に帰った時、「老病俱至、名山恐難遍遊。唯当澄懷觀道、臥以遊之」（老いと病と俱に至る。名山恐らくは遍く遊び難し、唯だ当に懷を澄ませて道を觀、臥して以て之に遊ぶべし）⁵⁾と言ったのに由来し、中国における山水画の精神や理念を意味する⁶⁾。また、宗炳の「画山水序」⁷⁾では、山水を逍遙することは「澄懷觀道」という聖人の営みと同じである、という儒学的価値観によって山水画の価値を確立させている。従って、「澄懷」という言葉は悌二郎が中国の金石書画を蒐集する堂号として、中国まで足を運び各地に遊歴し、実際の山水に入った臨場感や中国書画の蒐集に相応しい言葉であろう。

「澄懷」のみならず、大東文化協会への関与も悌二郎のコレクションがうかがえる。大東文化協会の設立は、衆議院議員・実業家の木下成太郎（1865～1942）が提唱した「漢学振興ニ関スル建議案」いわゆる儒教思想で日本文化を復興させようとする運動から始まる⁸⁾。1922年4月、悌二郎は近衛文麿、犬養毅、木下成太郎などと共に大東文化協会の第一回設立会議に出席し、副会頭となった。そして、協会創設目的の一つは、東亜の美術、音楽等の維持発達を図る事業に着手することであった。そのため、協会内に大東美術振興会が編成され、中国の金石書画を中心とする出版が行われた⁹⁾。大東美術協会の機関誌として、1925年から『大東美術』が発刊し、「発刊の辞」は次のような主旨を訴えている。

方今我が東洋に於ける思想文物の大勢を通観するに、海外物質文明の影響を受け、其の浸漸の久しき。終に矯激浮華なる弊習を馴致し、風尚日に遁下して、三千餘年の奎運今や委蛻混迷の危機に瀕しつゝあり。（中略）故に美術振興の擧たる其の意義の係る所、重大にして真に刻下の急務なるを念ひ。（中略）本誌を梓行し芸術の製作と鑑賞との両面に於て堅く主張を把持し、醇美なる東洋精神の發露と趣味の向上とを策し延て風教に裨補する所あらんことを期せり。¹⁰⁾

この主旨によると、西洋文明の影響のため東洋文明はまるで西洋文化に飲み込まれてしまったような強い危機に陥っており、美術振興や東洋精神の發揚などは現在の急務であるという。悌二郎も東アジア美術の振興や東洋精神の發揚をしなければならないという姿勢を鮮明にした。彼の収蔵していた中国金石書画を『大東美術』に掲載し、沈周「山水図軸」、王鑑「倣江貫道觀泉図軸」、「敦煌石室後晋觀世音菩薩功德幀」などの名作が相次いで紹介された。

また、悌二郎のコレクションを裏付けるもう一つの事例は、1928年11月24日から12月16日の間に、日中共催で行われた唐宋元明名画展覧会である。昭和天皇御大典の記念行事の一環として、この展覧会が

5) 沈約「宗炳伝」、『宋書』卷九三（中華書局、2018年）、2503頁。

6) 前掲注1)「内藤湖南と山本二峯：澄懷堂収蔵の中国書画をめぐって」、19頁。

7) 張彦遠『歴代名画記』卷六（中華書局、1985年）、208-209頁。

8) 井後尚久「山本悌二郎コレクションと澄懷堂美術館」（『中国21』第47号、2018年）、130頁。

9) 前掲注8)「山本悌二郎コレクションと澄懷堂美術館」、131頁。

10) 大東美術振興会編『大東美術』第1輯 第1冊（大東美術振興会、1925年）、発刊の辞。

開かれ、そこで悌二郎のコレクションが多く展示されたと指摘されている¹¹⁾。ただし、展覧会の開催目的について、開催趣旨をよく読むならば、その真意は内外の要人が集まるために東洋美術を宣伝する好機とするということで、むしろ御大典に便乗したといわれている¹²⁾。そして、展覧会の規則の第二条は次のように記している。

本會ハ日本及支那両国に傳存スル唐宋元明の名畫ヲ陳列刊行シテ、東方美術の精華ヲ發揚スルヲ以テ目的トス。¹³⁾

この規則によると、展覧会は「東方美術」の宣伝を目的として日中に伝承された唐宋元明の名画を展示し、併せて精麗な図録を監修することであるとわかる。悌二郎は展覧会を援助する賛助員として所蔵の中国書画を出品した。「支那古名画展覧会假目録」¹⁴⁾と同展図録『唐宋元明名画大観』（大塚巧芸社、1929）によると、悌二郎は呉道子「送子天王図巻」、劉松年「設色山水軸」、徽宗皇帝「五色鸚鵡図巻」、黄公望「秋山図」などの名作、計46点を出品したことがわかる。これは日本人出品者の中でトップの出品点数であり、膨大な山本コレクションの一面とその収蔵特徴がうかがえる。

ここで興味深いのは、東京美術学校学長かつ同展委員の正木直彦（1862～1940）『十三松堂日記』に書かれている悌二郎に関する記録である。昭和三年（1928）の日記に次のような記述がある。

十一月二十一日時雨 午前八時六分に王一亭、狄楚青、王傳熹、龐萊臣、闕鐸、橋川など上海よりの華客二〇人来着。出迎ふ。夫より出勤。（中略）十一月二八日晴 正午山本悌二郎氏上目黒五本木邸に支那画家一行を招待。午餐ありて出席す。犬養木堂、汪榮寶公使も出席せり。¹⁵⁾

これによると、悌二郎は上海より来日した中国画家と関係者を招待し、犬養毅、汪榮宝のような日中要人も出席したという。王一亭、狄楚青一行は唐宋元明名画展覧会に参会するために上海の出品者として来日し、収蔵の書画を多く展示した。1928年11月24日午前11時、東京府美術館での開会式において、正木直彦は歓迎の挨拶と開会の辞を述べた。また、祝辞は外務省「対支文化事業」部長岡部長景、駐日公使汪榮宝、賛助員代表農林大臣山本悌二郎、来日中国人代表前財務総長張弧、画家王一亭がそれぞれ行った¹⁶⁾。悌二郎は中国訪日画家の招待や展覧会賛助員代表などの役割を担い、その財力・収蔵力はいうまでもないが、彼の人脈の広さも垣間見える。

上述のように、悌二郎の堂号、大東文化協会への関与、さらに東洋美術を内外に示すため唐宋元明名画展覧会への尽力は、いずれも悌二郎の中国文化に対する憧れまたは中国書画の芸術性と学芸的伝統の

11) 井後尚久「昭和三年の御大典と山本悌二郎」（『書法漢学研究』第19・20号、2017年）、37-48頁。

12) H0786「唐宋元明名画展覧会開催の趣旨案」、『展覧会関係雑件』第四巻、38-39頁、外務省外交史料館蔵。

13) H0786「唐宋元明名画展覧会規則」、『展覧会関係雑件』第四巻、348頁、外務省外交史料館蔵。

14) 支那古名画展覧会假目録とは、唐宋元明名画展覧会出品の假目録を指す。

15) 正木直彦『十三松堂日記』（中央公論美術出版、1965年）、633-634頁。

16) 『日日新聞』、昭和3年11月25日。『展覧会関係雑件』第四巻、369頁。

共有を発信する、という蒐集と展示の実践だといってよいだろう。次に、悌二郎から中国の書画・碑帖に対して深い造詣を持っていた内藤湖南への漢詩や書簡を取り上げ、両氏の交友関係について考察したい。

三 山本悌二郎と内藤湖南の交友

山本悌二郎が内藤湖南といつどのような経緯で交友関係を結んだのかは明らかでないが、『内藤湖南全集』に見える序跋や書簡のうち、最も古いものは、1913年12月に湖南が悌二郎のために書いた澄懷堂所蔵の「文正瀟湘夜雨詩画軸跋」(全集第14巻、166頁)であるとされる¹⁷⁾。従って、両氏の交友は遅くともこの頃に既に始まっていたと考えられている。

内藤文庫の「湖南宛 山本悌二郎書簡」を調査すると、葉書を含めて計21通が確認できる。21通のうち、1通が日付不明で、残りの20通が近況報告、跋文依頼、書画鑑定、漢詩交流などの内容であり、書法作品としても、歴史資料としても、貴重な記録であることは強調しておきたい(以下、下線は筆者による)。

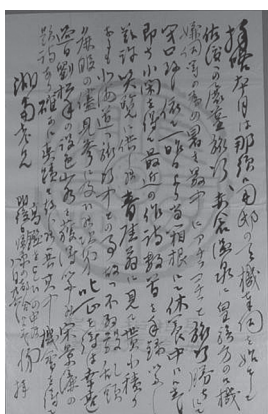


図1

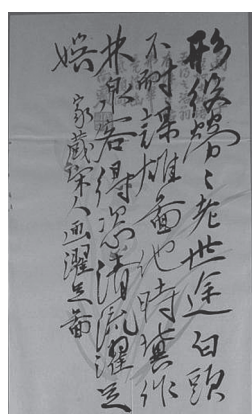


図2

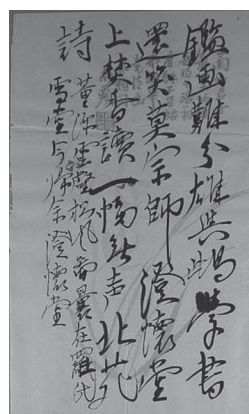


図3

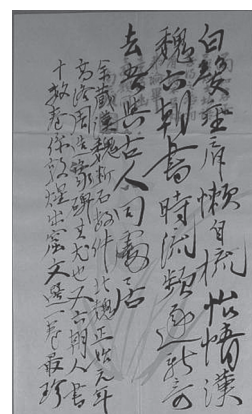


図4

図1 積文 拝啓、本月は那須御用邸の天機奉伺を始として、佐渡への展墓旅行、赤倉温泉に皇族方の御機嫌伺等の為め、暑さ最中にアチラコチラと旅行勝ちにて閉口致候。依て一昨日より当箱根にて休養中に御座候。即ち小閑を得て最近の作詩数首を手録いたし、茲許笑覧に供し候。青厓翁に見て貰ふ積りなるも、北海道へ旅行中との事故へ不取敢乱頭僂服の俣見参に及び候次第叱正を得は、幸甚過日劉松年の設色山水を獲得いたし候。宋景濂の題詩あり、確かに真蹟とは存じ候へ共、其中機会を得て高鑑を乞ひ可申候。明後日帰京の都合に御座候。八月廿六日。悌 拝。湖南老兄。

図2 積文 形役勞々老世途、白頭不耐謀雄図。他時冀作林泉客、得恣清流濯足娛。家藏宋人画濯足図。

図3 積文 鑑画難分雄與鷗、学書還笑莫宗師。澄懷堂上焚香読、一幅無声北花詩。董源雲壑松風図、

17) 前掲注1)、「内藤湖南と山本二峯：澄懷堂収蔵の中国書画をめぐる」、25頁。

曩在羅氏雪堂、今歸余澄懷堂。

図4 積文 白髮座肩懶自梳、怡情漢魏六朝書。時流頻逐新奇去、吾與古人同處居。余藏漢魏斷石數件、北魏正始元年高洛周造象碑、其尤也。又六朝人書十數卷、係敦煌出窟、文選一卷最珍。

図5 積文 作官頼得在閩曹、秋入城西霽色高。吾亦白頭黃魯直、伝杯猶似少年豪。黃庭堅詞云：伝杯猶似少年豪。丁卯初冬 二峯。

図6 積文 過日は御手紙頂戴拝読いたし候。玉咏は一誦三歎サスガ渋味ありて、翩々たる詩人の作ニは、其選を異にする様感ぜられ申候。早速次韻を試み、別箋に相認め候間、御笑正可被下候。『石渠宝笈』所載の徽宗の筆「五色鸚鵡図巻」手に入り居り候ニ付。御目に掛け度就ては、明十三日晚までに滞在ならば、同日五時頃より弊寓にて晚餐を共にいたし度、御都合の程電話にて御回答願上候。匆々。十二日 山本。内藤老兄。

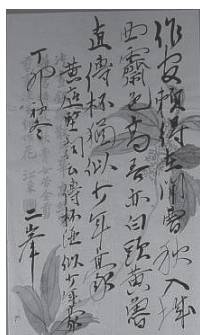


図5

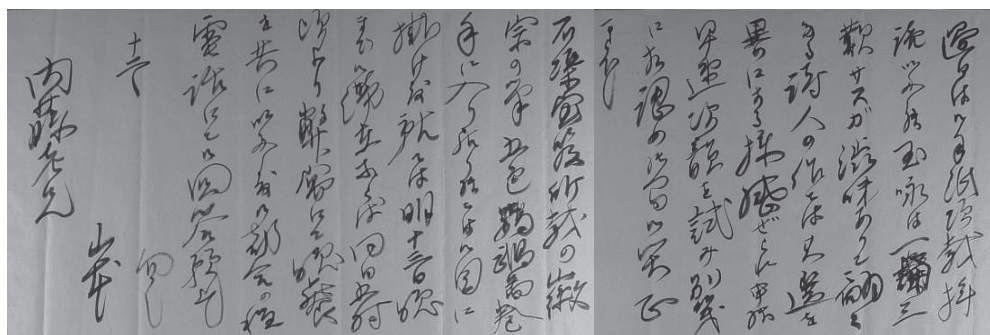


図6

図1の封筒の消印によると、日付は昭和3年（1928）8月26日である。これによれば、悌二郎は湖南に仕事や景勝の地を訪ねた近況を報告し、作った数首の漢詩を贈呈している。また、悌二郎はかつて劉松年「設色山水図」を入手し、その作品に宋景濂の題詩があり、確かに真蹟であると思うが、やはり機会を得て湖南に鑑定してほしいという興味深い内容がうかがえる。上述の唐宋元明名画展覧会に、悌二郎はこの劉松年「設色山水図」を出品したことから、恐らくこれは既に湖南の鑑定を得たうえで、展覧会の展示に辿り着いたと推測される。

図2～図4は、悌二郎が湖南に所蔵の中国金石書画について詠んだ漢詩である。書簡に「宋人画濯足図」、董源「雲壑松風図」、北魏「高洛周造象碑」、敦煌「六朝人書」など名品の名が確認できる。特に、「董源雲壑松風図、曩在羅氏雪堂、今歸余澄懷堂」という内容から、悌二郎は羅振玉（1866～1940）の旧蔵を手に入れたことがわかる。1911年辛亥革命が勃発し、羅振玉は家族を連れて京都に避難した。羅氏は来日に際して、夥しい金石書画をはじめ各種の文物を携帯し、日本での生活費と図書出版の費用を当てるため、その多くを湖南の紹介で博文堂を介して日本の有力なコレクターに売却していた¹⁸⁾。現在澄懷堂美術館には、羅振玉、内藤湖南、長尾雨山、黒木欽堂らの題簽・題跋を伴う蔵品が多く見られる。恐らく悌二郎はこれらの専門家に書画真偽の鑑定を求めていたのではないかと考えている。筆者の調査に

18) 前掲注1)、「内藤湖南と山本二峯：澄懷堂収蔵の中国書画をめぐって」、30頁。

よると、図3の董源「雲壑松風図」には、悌二郎による箱書きがある。その副巻には、羅振玉と長尾雨山による行書の題跋があり、それぞれの款記は宣統丙辰冬（1916）と癸酉除前三夕（1933）である。この作品の通伝によれば、もとは乾隆内府の旧蔵であり、羅振玉は日本にこの作品を将来したあと、悌二郎に売却した。さらに、唐宋元明名画展覧会に悌二郎の収蔵として出品され、図録『唐宋元明名画大観』と『澄懷堂書画目録』巻一に収録された。その後、悌二郎はこれを実業家の阿部房次郎（1868～1937）に譲り、現在は大阪市立美術館の阿部コレクションに所蔵されている。2017年「長尾雨山が見た中国書画」という展覧会には、董源「雲壑松風図」が出品されている。弓野隆之氏の指摘によると¹⁹⁾、董源「雲壑松風図」本幅は多くの問題を抱えてはいるが、実際に制作された当時の偽作者の指向が見て取れる資料であり、副巻の羅振玉や長尾雨山の遺墨は、書法作品としてのみならず、付属品も含めて日中近代における文物収蔵史、書画鑑賞史上の資料としても貴重なものであるという。

図5の漢詩には、黄魯直すなわち黄庭堅の名前が見える。悌二郎は黄庭堅、蘇東坡、王安石、陸游らの詩人を好み、漢詩のスタイルは宋詩に近いといえる。図5に示すように、悌二郎は黄庭堅の詩を引用し、自分は歳をとったが、まだ少年のようにやる気満々という気持ちを表した。

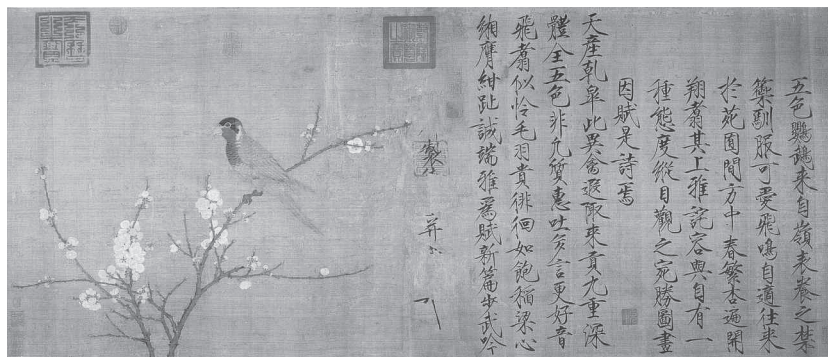


図7 徽宗「五色鸚鵡図卷」(局部)、絹本設色、53.3×125.1cm、ボストン美術館蔵

図6の書簡では、漢詩と収蔵品をめぐる内容である。悌二郎は湖南の作った漢詩を読み、大いに感嘆した。「サスガ渋味あり」、「翮々たる詩人の作」という高い評価を与えた上で、自分も早速詩箋に次韻²⁰⁾を試み、湖南に教示を請うという詩文の応酬がみられる。また、悌二郎は、清朝宮廷所蔵の『石渠宝笈』に収録された宋徽宗「五色鸚鵡図卷」(図7)を入手し、名作を鑑賞するために上京していた湖南を晚餐を誘った。この作品も上述の董源「雲壑松風図」と同じように、乾隆内府の旧蔵であり、唐宋元明名画展覧会に悌二郎の出品によって展示され、『唐宋元明名画大観』と『澄懷堂書画目録』巻一に収録されている。その後1933年にマリア・アントワネット・エヴァンズ基金 (Maria Antoinette Evans Fund) に購入され、ボストン美術館のコレクションとなった。2017年には神戸市立博物館で「ボストン美術館の至宝展：風流天子・徽宗と『五色鸚鵡図卷』」という展覧会に展示され、徽宗の姿を今に伝える貴重な作

19) 弓野隆之「董源「雲壑松風図」とその副巻」(『大阪市立美術館紀要』第18号、2018年)、10頁。

20) 次韻とは他人の詩と同じ韻字を同じ順序で用いて詩作することを指す。

品となっている。

この作品は、杏樹に止まる鮮やかな五色鸚鵡（近年、ズグロゴシキインコと判明）を描いているが、鳥を側面から描くのは唐の古様を示す一方で、精緻に描き出す表現は宋代の特色を見せ、徽宗の唐と宋の特色を巧みに融合している佳品となっている。また、画面右側に徽宗による題跋が記されている。力強く、特徴的な「瘦金体」による題跋は優れた書であるとともに、この鳥が「嶺表」（五嶺以南の地）から宮廷に献上されたこと、すなわち、はるか遠い地であっても、皇帝の権力の範疇にあることを示す作品となっている。

以上、悌二郎と湖南の翰墨交流と中国趣味の一面について考察した。最後に、悌二郎が自分の著述において湖南に序跋を依頼するエピソードに触れたいと思う。

1923年9月の関東大震災をきっかけに、悌二郎は自分の蒐集した中国書画の目録を作ろうと思い始めた。第一節に述べたように、1932年3月には作品1167点を掲載した『澄懷堂書画目録』（12巻）が刊行し、悌二郎の自序と湖南の序文が見られる。筆者は、悌二郎が湖南に『澄懷堂書画目録』序文を依頼した4通の書簡が内藤文庫にあるのを発見した。書簡の内容を時間順に翻刻すれば次のようになる（下線は筆者による）。

書簡一、1930年11月11日

拜啓、久々御無音に打過ぎ候処、不相変御清適奉賀候。過日博文堂を経て御依頼申上げし澄懷堂書画目録序文の儀、何卒宜しく御願申上候。十二月中には出版いたし度存居候。此頃間日月に任せ、時々詩なぞ試み居り候。茲許一首奉寄仕候間、御咲正可被下候。猶ほ同韻にて合計十首作り、筆写の代りに活版に付し候二付、是亦同封いたし候。敬具。十一月十一日 山本。湖南老兄。

書簡二、1931年8月15日

慈恩僧昔乞清詩、李句立成舒笑眉。吾待一文年已久、先生下筆又何遲。

豫ねて御願の拙著澄懷堂書画目録の序文、漢文にても、邦語体にても、可成至急御依頼申上候。序文は邦語体の小生の自序の外には、老兄の分のみにて、外ニは木堂の題字あるのみ。印刷は已に出来上り、唯だ老兄の一文を待居る次第、御賢察願上候。小生等政治家の所蔵は、所詮将来四散の運命を免れざるべきも、ソノ虞あればあるほど目録だけは、一日も早く上版いたし置き度存居次第に御座候。箱根坐宥雲起荘にて。悌 拜。湖南老兄。

書簡三、1931年10月3日

拜啓、腫物糖尿病等にて御悩の由承候。乍蔭心配いたし居り候処。本日博文堂より聞く処に依れば、今や全く御平癒の趣大慶ニ存上候。豫ねて御願申上げ居り候、我澄懷堂書画目録序文、何卒此際御執筆相願度、モハヤ全部出来上り、唯だ老兄の序文を待居り候、次第に御座候。今春看梅会唱和の詩を一括上版せし、「梅花集」一部拝呈致候間、御笑鑑可被下候。十月三日 悌。湖南老兄。

書簡四、1931年12月29日

拜啓、澄懷堂書画目録序文先達手御送致を蒙り、正に到着直ちに印刷へ廻し置き候処。当時内閣交渉の間際にて、非常に混雑致し居りし為め、貴方への御回答を井上靈山君に推し置せしに、同氏の失念にて竟に御無沙汰に相成り居り候趣。数日前博文堂より承り恐縮致し居り候、次第に御座候。菲薄汗顔に

候へ共、御礼の印迄に、金百円也郵便為替を以て、茲許同封拝呈いたし候間、御受納被下致候。書物の出来上りは、一月下旬頃と致し、出来次第一部贈呈可仕候。十二月廿九日 悌。湖南老兄。

書簡一によると、悌二郎は1930年12月中に『澄懷堂書画目録』を上梓する予定で、博文堂を通して湖南に序文を依頼したという。しかし、書簡二から書簡四までの内容と湖南による序文の日付と照合した結果、悌二郎は1930年11月から何度も序文を依頼したが、結局湖南による序文が出来上がったのは、一年後の1931年12月9日であった。422文字しかない序文を書き上げるのに、なぜ湖南は一年間もかかったのか。実は、帝国学士院会員となった湖南は、ちょうど1930年12月27日に宮内大臣一木喜徳郎（1867～1944）から天皇・皇后に進講の依頼を受けていたのである。依頼状の内容は、次のとおりである。

明年講書始ノ儀被為行候節。漢書進講被仰付候。此段及通達候也。追テ日時御治定ノ上ハ更ニ通知可及候。昭和五年十二月廿七日、宮内大臣一木喜徳郎。帝国学士院会員、内藤湖南殿。²¹⁾

この内容によると、湖南は一木喜徳郎に頼まれ、1931年天皇・皇后に漢学を教える役目を与えられたという。そして1931年1月26日、湖南は帝国学士院会員を代表する学問の権威者として、宮中の講書始に召されて天皇・皇后に唐の宰相杜佑『通典』を進講した²²⁾。湖南は天皇に進講の準備を進めるため忙しく、序文を書く余裕がなかったのかもしれない。また、1931年5月16日、博文堂の原田庄左衛門から湖南宛ての書簡は次のように述べている。

(前略) 本年三月以来之御病氣嚙々御一統様御心痛之御事と奉恐察候。乍此上折角へ御養生専一ニ被成下為国家先生之御代り候。御方日本国内ニ御一人も無之候間、何卒へ萬々歳之御長寿奉祈念候。²³⁾

書簡によると、1931年3月から湖南は病気のため、原田は暫くは「養生専一」というアドバイスを与えた。実は、当時既に晩年に入った湖南は、「腫物」や「糖尿病」などの病気を患い、体調が悪化しつつあるため、悌二郎の依頼に直ぐ応じられない状況だったのではないかと筆者は考えている。

おわりに

本稿は、関連序跋と「内藤湖南宛 山本悌二郎書簡」を手掛かりに、悌二郎の生い立ち、中国書画コレクションとその交友の実像を中心として考察してきた。最後に悌二郎が日本における中国書画研究に果たした功績について述べたい。

21) 内藤湖南宛一木喜徳郎書簡、1930年12月27日、関西大学内藤文庫蔵。

22) 神田喜一郎、内藤乾吉編『内藤湖南全集』巻7(筑摩書房、1970年)、226-237頁。

23) 内藤湖南宛原田庄左衛門書簡、1931年5月16日、関西大学内藤文庫蔵。

まず、悌二郎は、近代日本の中国書画収蔵界の重鎮として、辛亥革命以降中国書画の日本伝来において看過できない人物である。澄懷堂美術館はいうまでもなく、何より『澄懷堂書画目録』と『宋元明清書画名賢詳伝』の二大巨著を遺したのである。特に、『澄懷堂書画目録』は、山本コレクションを編年の順番により、六朝時代から清代まで、敦煌寫経・書画を含む名家の作品を網羅的に収めている。江戸時代以前の日本における部分的な中国絵画受容とは異なり、中国の「正統的」絵画史観に則った画家の作品が揃えられている。これは悌二郎が内藤湖南、長尾雨山ら碩学に助言を仰ぎつつ、意識的に蒐集した成果であると思われる。

次に、内藤湖南は、晋唐を基調とする典雅な書風に長じる書家としても知られるが、その見事な「題跋芸術」だけでなく²⁴⁾、中国の「正統的」画史・画論に対する独特な見解があり、悌二郎の寄せた厚い信頼が感じられる。また、湖南は中国書画に関心をもつ悌二郎に新知見を示し、蒐集の指南役をつとめた側面もあったのではないか。両氏の交友は、文人としての友好関係を示したばかりではなく、中国美術史研究において、悌二郎のような複合的な役割を果たしたコレクターの重要性も示している。

【付記】本稿は、日本科学協会の笹川科学研究助成「王一亭と近代日本美術界：大正・昭和前期の「興亜美術」運動に関する研究」（研究番号：2020-1017）による研究成果の一部である。また、2020年11月6日、山本悌二郎関係書画の調査について、大阪市立美術館の弓野隆之先生と森橋なつみ先生より多大な便宜と貴重なご教示を頂き、深く御礼申し上げたいと思う。

24) 前掲注1)「内藤湖南と山本二峯：澄懷堂収蔵の中国書画をめぐって」、33頁。

